

# ハコネサンショウウオの斑紋と縦条について

大 賀 二 郎

## はじめに

サンショウウオ科 Hyobiidae は個体が少ない上に森林の倒木や洞などに生息しており、しかも夜行性のため、分布や生態に未知な点が多い。兵庫県下ではヒダサンショウウオが六甲山系紅葉谷や唐櫃方面にかけて分布していたが、昭和38年の水害によって絶滅したものとみられている。低地性のカミサンショウウオは三木、三田市郊外や丹波の山間部に局地的に分布していることが知られている。

この科は全国的に減少の傾向にあるが、奈良県十津川町山葵谷にはハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* の相当の個体群をいまなお見ることができ。更に特異なケースであるが、同地域に分布する個体群はその背面模様在一定しておらず、一見別種のような変異がある。斑紋状と縦条状の顕著なパターンがある。その生息地の環境とともにあわせて報告したい。

## 生息地の環境

1969年4月29日大峯山系の大普賢岳(海拔1,530m)登山の際に、その谷の一つである山葵谷(このあたりで海拔900m)の溪流中で、ハコネサンショウウオの幼生多数を発見した。その後1970年5月、1973年4月、1975年4月と観察し、そして1979年4月15日にも相当数の個体がいることを確認した。

大普賢岳のそそり立つ岩壁に源を発した地獄谷と覗き谷の二支谷をあわせて山葵谷といわれているが、巨岩の間を溪流が噛み、また幽邃な淵となって、まさに昼なお暗き幽谷の感がある。岩場にはピロウドシダ、クモノスダが付着し、斜面にはコバイケイサウの群落がある。稀であるがクマガイサウの丸い葉もみられる。このような植物相からしても、深山の様相をもっている。

ハコネサンショウウオはこのような巨岩の絶壁地帯からやや下流に生息している。渓谷の両側には杉の原生林が迫っているが、大小の石がゴロゴロしていて幾分明るいところだ。奈良交通の山葵谷のバス停から徒歩10分程度である。

同種はこの地点の溪流の石下に局地的に棲んでいるが、本流の中央部や急流にはいないようだ。直径30cm程度の石の下で、水深20cm、水温10°前後、外景が幾分明るいところが理想的なようだ。石をめくっても静止していて、保護色で発見しにくい。両手で掬うことも可能だが、驚

くと敏捷に泳いで石下にかくれる。同じ石下に2以上の個体はいない。テオトリーのためとみられる。体長は5~9cm程度で、個体に大きな較差がある。幼生期が27ヶ月といわれており、幼生2年にわたる個体がいるためだ。外観は鯉があるほかは成体と殆んど変らない。

食物連鎖の関係では、食餌としてはカゲロウ、カワトビゲラの幼生、天敵としてはヤマメ、ヨシノボリなどの魚類が考えられ、またヤマヒキガエルも生息している。

## 斑紋と縦条

ハコネサンショウウオは垂直分布の上では高地性のもので、東北では平地で海岸近くにもいるが、他の地域ではおおむね1,000m以上の源流近くに分布し、高山帯の雪溪近くにもいるといわれている。局地性があるが、分布域は東北、関東、中部、近畿および四国とかなり広域にわたっている。

地域によってかなりの固体変異があり、その背面模様は、東北のものは微細な斑紋群、紀伊半島のものは大柄な斑紋、そして一般的には帯状の縦条が観察されている。

山葵谷の種の背面模様はかなりの変異があるが、原型としてはつぎの斑紋型と縦条型の2型につきる。同一地域にありながら、全く異なる2型を包含しているのである。

## (写真参照)

これ以外に斑紋がほとんど消失するか、または微細な斑点群のある個体がある。いずれも個体の小さなものに見られることから、斑紋の形成過程のものであろう。しかし縦条型のもの小さな個体のときから、線状のものが背にあらわれている。

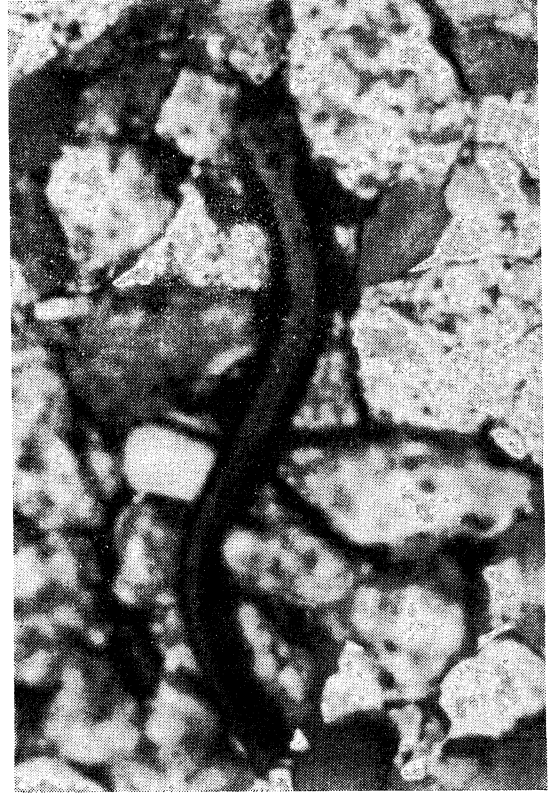
個体数の割合は1979年4月15日13~15時の採集結果では斑紋型17、縦条型4であった。他の時点での結果も大体このような割合であった。

背面の基色はいずれも紫褐色である。腹面は黄褐色で斑紋や斑点がない。

ブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオの外形と斑紋が本種によく似ているが、本種の幼生時の四肢の外側には明瞭なひだがあること、また指趾の先には鋭い爪があること、および内部構造では成体後でも肺がなく皮膚呼吸を行うことなど、大きな特色がある。検索の大きなきめ手になっている。



斑紋型 橙黄色の不規則で大きな斑紋が頭部から  
(写真 I) 尾端にそって散布する。



縦条型 橙黄色の幅広い一つの縦条が背にそって  
(写真 II) 頭部から尾端まで走る。

### おわりに

小型サンショウウオは地理的に隔離されているため、分化した固有の種が多く、そのことは逆にいえば、かなり同質的な種群を形成しているともいえる。外形や斑紋など酷似した種が多い。

また同種であっても、かなりの地方型を生じており、加えて固体変異もある。背面模様は特にかなりの固体変異があり、まだ固定していない面もある。

山葵谷のハコネサンショウウオは斑紋型と縦条型との歴然とした2型があるが、これはどのように位置づけて考えたらよいのだろうか。縦条も斑紋も保護色に違いな

いが、同種内でこのような2型が生じるのはなぜだろうか。また同一地域でもそれが生じる背景はなにか。

幸に、山葵谷には今でも相当の個体群がある。深く観察すれば、何か系統づけられるかも知れない。今回はとりあえず、事実の報告にとどめたい。

### 参考文献

- |              |         |             |
|--------------|---------|-------------|
| 室井 綽         | 1974    | 公害・兵庫県の生物   |
| 上野俊一<br>中村健児 | 共著 1963 | 原色日本両生爬虫類図鑑 |
| 千石正一         | 編 1979  | 原色両生・爬虫類    |
| 岡田 要         | 1957    | 爬虫類・両棲類     |